

《2018年5月（通算261回）月例会報告》

\*\*\*\*\*

# ワールドカップのグループリーグから フェアネスを考える

井上俊也  
(大妻女子大学)

\*\*\*\*\*

【日時】2018年5月22日（火）19:10～21:00（終了後は「景宜軒」～23:30ごろ）

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室

【テーマ】ワールドカップのグループリーグからフェアネスを考える

【演者】井上俊也（大妻女子大学）

【参加者（会員・メンバー）7名】

井上俊也（大妻女子大学）、大河原誠二（桐窓サッカー倶楽部）、笹原勉（日揮）、関秀忠（弁護士）、  
中塚義実（筑波大学附属高校）、守屋俊秀（世田谷区サッカー協会）、吉原尊男

【参加者（未会員）4名】

守屋佐栄、佐藤雄大（桐窓サッカー倶楽部）、国島栄市、霧島剛

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません（ご本人の了解が得られた範囲で公開しています）

## <目次>

1. はじめに
2. FIFA ワールドカップにおけるグループリーグの方式
3. FIFA ワールドカップにおけるグループリーグの開催都市
4. 日本代表のグループリーグにおける移動距離
5. FIFA ワールドカップにおける各チームの移動距離
  - 5-1. 2018年ロシア大会
  - 5-2. 1998年フランス大会
  - 5-3. 2002年日本・韓国大会
  - 5-4. 2019年ラグビーワールドカップ日本大会
6. ワールドカップにおける組み合わせ・日程・会場決定のプロセス
  - 6-1. FIFA ワールドカップの日程の決定プロセス
  - 6-2. ラグビーワールドカップの日程の決定プロセス
7. ワールドカップにおける「フェアネス」を考えるーディスカッション

中塚：皆さんこんばんは。5月の月例会、通算で第261回目です。ワールドカップも近づいてきましたが、ちなみに行かれる方いらっしゃいますか？（数名が挙手）  
すごいですね。今年のワールドカップと来年のラグビーのワールドカップを合わせた形で、今日は井上さんにご登壇いただきます。

## 1. はじめに

今日お話しさせていただきます井上と申します。本日はお忙しい中来ていただきありがとうございます。全体の流れについては目次のとおりですが、FIFAワールドカップのグループリーグにおけるチームの移動についてお話いたします。このチームの移動というのはサポーターの移動と同じです。ゲームにおける選手の移動についてはいくらかでも研究があります。どの選手が何キロ走ったとか、スプリントが何回あったとかということに関して様々な研究がありますが、チームがどれだけ移動したかということについては誰も研究していないことに気が付きました。研究していないということはそこに大きな落とし穴があるということです。

先ほど挙手いただいたワールドカップに行かれる方は自分はこういう動きになるんだ、ということを知っていたか、テレビ観戦の方は自分がテレビを見ないで寝ている間にプレーしている人と応援している人はすごく苦勞しているのだ、ということを感じてくれればな、と思っています。

自己紹介ですが、1961年に愛媛県松山市で生まれました。私にとっての同年代の最大のスターは中塚先生であり風間八宏です。野球はパツとしなくて小早川くらいです。芸能人は松田聖子、政治家は誰もいません。私は大学を卒業してから26年間NTTに勤務しておりました。その中で5年間フランスにおりました。それが私の人生にとってすごく大きな影響を与えました。その理由ですが、フランスのビジネスエリートが基幹産業に集まらない、ということを感じたからです。フランスはスポーツだけではなく、芸術やグルメがすごいと言いますが、芸術やグルメだけがすごいのではなく、どんな産業にも人材が散らばっているということです。日本だと銀行とか商社に人材が集まってしまうのは対照的です。フランスの場合にはどんなチームにも背番号10がいるということ、ここに感動しました。逆にフランスはいわゆる基幹産業に人材が集まらない、集中しない、ということがあの国の弱さです。

私はその国でスポーツマネジメントというものに知り合いまして、かれこれ25年間たっております。中塚先生と知り合って20年強になります。スポーツの世界では早稲田大学スポーツナレッジ研究所の招聘研究員に3年前になっています。本職は大妻女子大学のキャリア教育センターで学生のキャリア教育をしております。

今回がサロンでは6回目の発表となります。サッカー、フランス、ラグビー、このあたりを中心に活動しています。昨年4月にはラグビーのワールドカップについてお話しさせていただきました。

私の問題意識ですが、この4、5年、ラグビーのワールドカップの日程について関心を持って研究してきました。これは完全に見る側の立場に立ってつくられています。今年は本家のFIFAワールドカップ、サッカーのワールドカップについて興味を持って調べてみました。

最近、フェアネスということが話題になります。フェアネスというのは公正、公平、ルールを守るなどいろいろな意味があると思います。今日お集まりの方もそれぞれのお考えがあると思います。この最近でも日本大学のアメリカンフットボール部の話題もありますし、ついこの1時間半前は国技館で鶴竜が横綱であるにもかかわらず、立ち合いで変わったということで大ブーイングがあったとも聞いています。ルール守っているからいいではないかという意見もあるかもしれません。そういうよう

なことがあり、政治の世界でもフェアネスが問われています。

そういうことでFIFAのワールドカップの1月前に考える機会を作りたいと思います。

私は大学教授という職業柄、学会で報告したり論文を書いたりしています。今日の報告の位置づけですが、今年の夏に明治大学で行われるスポーツ産業学会で学会報告することが決まっております。今日は5月30日のガーナ戦のようなもので、皆様からいろいろと意見を頂いて本大会である7月の学会に臨みたいと思います。西野ジャパンは修正が必要ないかもしれませんが、私の場合は修正が必要だと思いますのでよろしく願いいたします。

## 2. FIFA ワールドカップにおけるグループリーグの方式

さて、FIFA ワールドカップにおける大会形式、グループリーグについて世界史の授業のようですが、紹介しましょう。まずは最初の1930年大会、なんとこの大会はグループリーグを行っています。そして1934年のイタリア大会と1938年のフランス大会は完全ノックアウト制でした。戦後になって1950年のブラジル大会は4チームによるグループリーグを2回行いました。いわゆるマラカナン悲劇の大会ですが、この大会はリーグ戦で優勝を決めたので決勝戦はありませんでした。そして1954年大会から1970年大会までは16チームが出場し、4チームずつのグループリーグを行い、上位2チームで決勝トーナメントを行っていました。ちょうど現在の半分のサイズで現在と同じ形式でした。

1974年大会、ヨハン・クライフとフランツ・ベッケンバウアーの大会で日本人にとってはテレビ中継の始まった最初のワールドカップでした。この大会とマリオ・ケンペスの1978年大会からパオロ・ロッシの1982年大会までは1次リーグを行い、続いて2次リーグを行い、2次リーグの1位で決勝戦あるいは準決勝を行っていました。1982年大会から24か国が出場するようになったのですが、ディエゴ・マラドーナの1986年大会から日本がドーハの悲劇で出場を逃した1994年大会まではグループリーグの上位2チームと3位チームの中で成績の良い4チームが決勝トーナメントに出場するというイレギュラーな形式になります。

日本人にとって2回目の最初のワールドカップは初出場を果たした1998年大会です。この大会から現在まで32か国が出場、グループリーグの上位2チームで決勝トーナメントを行っています。32か国出場は今大会までですので、次回からは変わっていきます。

そしてこのグループリーグの開催方法ですが、私が考えるに2回の大きな変更があります。まず最終戦2試合を同時刻キックオフに変えた1986年メキシコ大会です。これは1982年大会のグループリーグの西ドイツ-オーストリア戦で両チームがスコアメイクを行い、アルジェリアが1次リーグ敗退となりました。この件を受けてスコアメイクができないように最終戦は2試合同時キックオフ、つまり2会場で同時に試合が行われるようになりました。なお、1986年大会は24チーム中16チームが決勝トーナメントに進んでいますので、メキシコの青い空で出場を逃した日本も出場していたらいいところに行っていたかもしれません。

8
グループリーグの開催方法の変更
<b>1986年メキシコ大会</b>
グループリーグの最終戦2試合が同時刻にキックオフ グループリーグで3位のチームにも次のステージの可能性
<b>1998年フランス大会の変更点</b>
上位2チームのみが次のステージ進出(32チーム) グループリーグの開催都市がランダムになる

もう1つの変更は我々の日本が初めて本大会に出場した1998年大会の時のことです。上位2チームが決勝トーナメントに進むという正常化がこの大会で行われました。そして、今日お話ししたいことですが、グループリーグの開催都市がランダムになったということです。皆様覚えていらっしゃるかと思いますが、日本は第1戦はトゥールーズでアルゼンチン戦、第2戦はナントでクロアチア戦、そして第3戦はリヨンでジャマイカ戦で中山雅史選手が初ゴールをあげました。この大会は日本が初出場したこともあり、特に行かれた方も多かったと思いますが、ワールドカップはその都度移動するのだ、と感じられたかと思います。しかし実はこの大会からだったのです。

### 3. FIFA ワールドカップにおけるグループリーグの開催都市

大昔の話をしてもしようがないので、24チームになった1982年のスペイン大会のお話をしましょう。1982年大会はグループ1からグループ6までの6つのグループリーグが行われました。この当時はFIFAランキングなるものがまだありませんでしたので、その前の大会の成績などでシード国を決めていました。イタリア、西ドイツ、アルゼンチン、イングランド、スペイン、ブラジルがシード国です。ここでグループ1について説明しましょう。シード国のイタリア以外にポーランド、カメルーン、ペルーの3か国がいます。そして開催都市はメインのビーゴとサブのラコルーニャでした。イタリアは3試合ともメインのビーゴで行い、ポーランド、カメルーン、ペルーはイタリア戦だけビーゴで行い、イタリア戦以外の試合はラコルーニャで行います。つまり、イタリアはビーゴに居座り、それ以外の3か国はラコルーニャとビーゴの間を往復または片道の移動をすることになります。これと同様にグループ2以下もシード国はメイン会場で3試合、それ以外の国はサブ会場2試合、メイン会場1試合となります。なお、アルゼンチンのグループ3でカッコ内にバルセロナとあるのは前回優勝国のアルゼンチンがバルセロナで開幕戦を行いました。

サッカーの好きな皆さんにとってはイタリアの方が土地勘があると思いますので、1990年のイタリア大会の事例で説明しましょう。

シード国はイタリア、アルゼンチン、ブラジル、西ドイツ、ベルギー、イングランドの6か国です。そしてグループAはメイン会場がローマ、サブ会場がフィレンツェ、グループBはナポリがメインでバーリがサブです。カッコ内にミラノとありますが、これはミラノで開幕戦を行いました。前回優勝のマラドーナのアルゼンチンがロジェ・ミラのカメルーンと対戦、カメルーン

10	
グループリーグの開催都市	
1982年スペイン大会 ○シード国は3試合ともメイン都市 それ以外の国はシード国戦以外はサブ都市	
グループ1:	ビーゴ&ラコルーニャ (○イタリア、ポーランド、カメルーン、ペルー)
グループ2:	ヒホン&オビエド (○西ドイツ、オーストリア、チリ、アルジェリア)
グループ3:	アリカンテ(&バルセロナ)&エルチェ (○アルゼンチン、ベルギー、ハンガリー、エルサルバドル)
グループ4:	ビルバオ&バジャドリード (○イングランド、フランス、チェコスロバキア、クウェート)
グループ5:	バレンシア&サラゴサ (○スペイン、ユーゴスラビア、北アイルランド、ホンジュラス)
グループ6:	セビリア&マラガ (○ブラジル、ソ連、スコットランド、ニュージーランド)

11	
○シード国とメイン都市&サブ都市	
1990年イタリア大会	
グループA:	ローマ&フィレンツェ (○イタリア、チェコスロバキア、オーストリア、米国)
グループB:	ナポリ(+ミラノ)&バーリ (○アルゼンチン、ソ連、ルーマニア、カメルーン)
グループC:	トリノ&ジェノバ (○ブラジル、スコットランド、スウェーデン、コスタリカ)
グループD:	ミラノ&ポローニャ (○西ドイツ、ユーゴスラビア、コロンビア、UAE)
グループE:	ヴェローナ&ウディーネ (○ベルギー、スペイン、ウルグアイ、韓国)
グループF:	カリアリ&バレルモ (○イングランド、オランダ、アイルランド、エジプト)

がオマン・ビークのゴールで勝利し、0-1でアルゼンチンが敗れるという波乱が起きました。ところがアルゼンチンは第2戦からナポリで戦いました。この当時ナポリに所属していたアルゼンチン人選手がマラドーナでした。エースの地元ナポリで息を吹き返したアルゼンチンは最後には決勝まで進出します。ブラジルのいるグループCはトリノとジェノバです。以下もスライド11のようになっています。この大会の予選で日本は箸にも棒にもかからない感じで敗退してしまいましたが、例えばUAEの代わりに出場していたとしたら、グループDでボローニャとミラノで試合をしたわけです。韓国の代わりにグループEのウディーネとヴェローナの往復も悪くはないと思いますが、グループCのジェノバとトリノの往復は全く観光資源のないところで全然つまらないと思います。

それからこれはこれでたいへんなのがグループFのカリアリとパレルモの往復です。これはイングランドとオランダなど危ない国を島に閉じ込めたという有名な話があります。

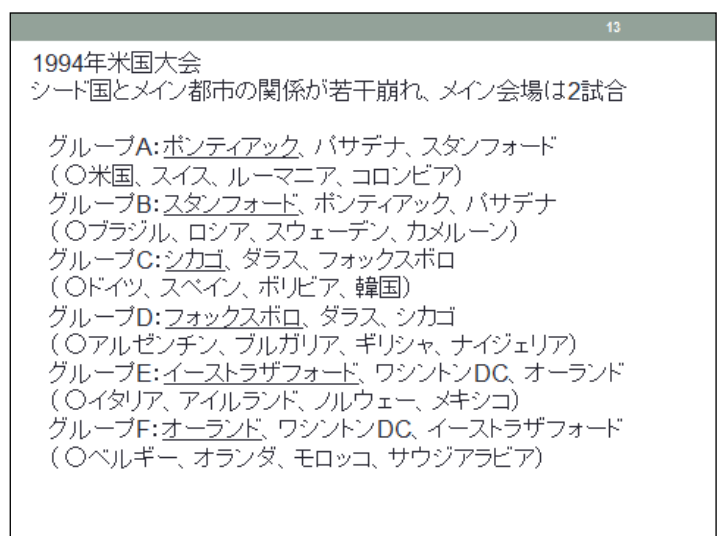
ここでスライド12を見ていただきたいのですが、開催会場の地理的な分布です。各グループはメインとサブの2会場がありますが、グループごとに色と形で分けています。グループAは青い丸でローマとフィレンツェ、グループBは紺の下向き三角でナポリとバーリ、グループCは緑の星でトリノとジェノバ、グループDは黒の上向き三角でミラノとボローニャ、グループEは赤の四角でヴェローナとウディーネ、グループFは赤の二重丸でカリアリとパレルモです。色はシード国のメインかサブのユニフォームの色



にしています。地理的に近い2会場を各グループリーグでは使用しており、基本的には各チームはあまり移動しなくてよかったわけです。逆に応援に行ったサポーターとしては1都市または2都市しか訪問できませんでした。皆さん、イタリア大会だったらどのグループがいいですか。私だったらグループAのローマ、フィレンツェですね。

さて、緑の星印がついているグループCを見てみましょう。ブラジル以外のコスタリカ、スコットランド、スウェーデンのファンはジェノバとトリノを訪れます。この国の人たちはイタリアというのはきれいな工業都市で何もなかったな、という感想を持って帰ってくるわけです。ところが生まれて初めてイタリアを訪れたエジプトの人は、カリアリとパレルモを往復し、フリーガンに囲まれ、なんなんだ、この国は、という感想を持つのだと思います。

そしてアメリカ大会です。アメリカ大会は広大な国で行われました。シード国が3試合同じ会場で行うのではなく、シード国は2試合を同じ会場で行うことになりました。これは広大な国土であったことに加え、会場がサッカー場ではなくアメリカンフッ





トボール場で行われたこともあったかと思えます。

ドーハの悲劇で出場できなかった日本がもしアジアで最下位の韓国の代わりに出ていたとしたら、グループ D、シカゴ、ダラス、フォックスボロ、移動も大変ですが、相手もドイツ、スペインとハードなグループでしたね。

そしてフランス大会ですが、12会場を使いました。日本が本大会に初出場し、ご記憶の方も多いと思います。日本はトゥールーズでアルゼンチン戦、ナントでクロアチア戦、そしてリヨンに移動してジャマイカ戦を戦い、会場を移動するようになりました。これが今日まで続いています。

なぜこのようなことをしたかですが、ローランギャロス方式ということでかつての名選手、後の UEFA の会長であった当時の大会組織委員長のミッシェル・プラティニが提案したものです。ローランギャロスというのはテニスの全仏オープンで今年も来

週から始まり、四大大会のひとつです。このローランギャロスは波乱が多い、赤土の下には魔物が潜んでいる、とよく言われます。クレイコートだから波乱、番狂わせが多い、という意見もありますが、世界的に見れば芝のコートよりもクレイコートのほうが数は多いはずですが、なぜ番狂わせがローランギャロスで多いかという理由のひとつに第1シードの選手が常にセンターコートで試合をしないようになってきているからというものがあります。通常のテニストーナメントの場合は第1シードの選手はずっとセンターコートで試合をします。しかしローランギャロスは第1シードの選手をセンターコートにくくりつけません。もっともローランギャロスクラスになると第2コートでも相当の人数が収容できますが、第1シードの選手でも毎試合コートが変わることになります。これで番狂わせが起こるといわけです。

これには大きくは2つの意味があります。まず、第1コートのチケットを買った観客が同じ選手ばかりを観戦するわけではないということです。メジャートーナメントの場合は主要コートごとにチケットを販売します。第1コートのチケットを通して買った場合は、今日も明日もノバク・ジョコビッチの試合を見るということになってしまいます。いろいろな選手が見られるようにするという事です。先ほどのトリノの話ですが、観戦しに行った側の人間としては「トリノやジェノバは何もなくてつまらなかった」になるわけですが、逆に開催都市の住民はその都市で限られたチームの試合しか見られないということです。例えば、フィレンツェの市民はチェコスロバキアとオーストリアと米国の試合しか見られないということです。これでどこがワールドカップなのでしょう。しかもシード国を見ることができません。当時のフィレンツェは結構強かったですから、ワールドカップよりも毎週土曜日の試合のほうが面白い、ということにもなりかねません。そういうことでいろいろなチームの試合を開催都市の人が見られるようにしました。

それからもう1つはフランスの交通網の優秀性を世界にアピールするという事です。フランスには TGV という高速鉄道があり、フランス国内で選手やファンに簡単に移動してもらい、その優秀性を認識してもらおうということです。それからこれに派生して、観光立国フランスとして海外ファンの誘引と観光収入の増加も狙いとしています。例えば日本のファンが1万人か何千人かがフランスに応援に行ったとします。そういう人たちが3試合行うトゥールーズにずっと滞在してもらおうのではなく



ていろいろな都市、地方に行ってもらおうということです。

それから、最後のこのコメントが本音かもしれません。プラティニがインタビューで発言していたので間違いのないと思いますが、波乱を多くすれば、前評判の低いフランス代表にもチャンスがあるのではないかとということです。当時のフランス代表は大会前はガタガタの評価で、開催国なのに恥ずかしいということで、当時の監督のエメ・ジャッケはブーイングにさらされていました。そういう弱者にとって番狂わせ、波乱が起これば、上位進出できるのではないかとということでこの方式をプラティニは導入しました。フランスが本命視されていればこの方式は採用されていなかったかもしれません。

1998年フランス大会			
グループH			
6月14日	アルゼンチン-日本	トゥールーズ	
6月14日	ジャマイカ-クロアチア	ランス	
6月20日	日本-クロアチア	ナント	
6月21日	アルゼンチン-ジャマイカ	パリ	
6月26日	アルゼンチン-クロアチア	ボルドー	
6月26日	日本-ジャマイカ	リヨン	
トゥールーズ 市宮競技場			
6月11日	グループB カメルーン-オーストリア		
6月14日	グループH アルゼンチン-日本		
6月18日	グループC 南アフリカ-デンマーク		
6月22日	グループG ルーマニア-イングランド		
6月24日	グループD ナイジェリア-パラグアイ		
6月29日	ラウンド16 オランダ-ユーゴスラビア		

さて、日本の入っていたグループHを見てみ

ましょう。我々は日本戦しか関心がなかったかと思いますが、スライド16のとおり、全6試合がすべて異なる会場で行われています。これは今大会までずっと引き継がれています。

逆に日本が初戦を行ったトゥールーズはどうなっているのでしょうか。実はチケットがないと大騒ぎになったアルゼンチン戦の前にカメルーン-オーストリア戦を行っています。日本-アルゼンチン戦のあともトルシエが監督をしていた南アフリカとデンマークの試合、ルーマニア-イングランド戦もあり、グループリーグの最後の試合はナイジェリア-パラグアイ戦です。また決勝トーナメントの1回戦、ノックアウトステージのラウンド16は結果としてオランダとユーゴスラビアの試合になりました。トゥールーズの人たちにとっては6試合でシード国3チームも迎え、各大陸のチームを観戦することができ、ワールドカップの名にふさわしい顔ぶれかだったと思います。このように開催都市の人に多くのチームを観戦してもらうことになりました。

#### 4. 日本代表のグループリーグにおける移動距離

さて、ここまでは見る側の立場の話をしてきましたが、ここからはやる側の立場の話をしていきます。日本代表について各大会ごとに累計移動距離を求めてみました。これはWikipediaとGoogleマップを使ってスタジアムの緯度と経度を調べ、これを元に2点間の距離を計算するサイトがあり、これで移動距離を計算しました。結構大変な作業で1大会あたり半日かかります。

1998年大会の場合は、日本はトゥールーズからナントに移動して470キロ、そしてリヨンに移動して合計986キロとなります。この出発点はあくまでもトゥールーズのスタジアムです。実際にはキャンプ地が存在しますし、実際の移動経路はパリを経由することもあるかもしれませんが、スタジアム間の距離を移動距離としています。

続く2002年大会は地元間開催でした。埼玉スタジアムから日産スタジアムで45キロ、そして長居に移動して431キロ、最後は宮城に行つて1,069キロです。日本はグループリーグを1位抜けて、最後の試合となった決勝トーナメントは宮城でした。当時のマスコミには2位抜けになっていたら、決勝トーナメントの1回戦は神戸で、移動距離が少ないから勝つたのではないか、という報道もありました。ただし相手はブラジルでした。しかしそれは間違いだったということの後ほどお話ししています。

2006年大会は思わぬ逆転負けをくらってカイザーслаウテンからニュールンベルクまで242キロを移動します。そしてさらに350キロくらい移動して最後はブラジルにとどめを刺された格好になりま

した。ここまでの3大会は次以降で紹介する大会に比べてそれほど移動距離は大きくありませんでした。

そして2010年、この大会は移動距離だけではなく、高低差、空気の薄さ、音のうるささなどの要因も劣悪な環境の中で試合が行われた大会でした。そして移動距離もかなりありました。ブルームフォンテンからダーバンで474キロ、東京から大阪より遠いです。ダーバンからルステンブルクでさらに600キロ、そしてこの間には高低差も存在します。最後のルステンブルクからプレトリアは短くて100キロくらいです。

それでは前回大会、逆転負けをしてがっかりしてレシフェからナタールまで247キロ移動して移動してギリシャとドロー、そして最終戦のコロンビア戦で何とかなるぞ、とクイアバというところまで2,500キロ移動して、残念でした、という結果になりました。

そして今度のロシア大会です。行かれる方もいらっしゃると思いますが、覚悟してください。地図を参照しながらだと分かりやすいですが、まずサランスクでコロンビア戦、3-0くらいで勝てるでしょうか。エカテリンブルクでのセネガルにも5-0くらいでしょうか。ボルゴグラードに移動してポーランドは決勝トーナメント進出が決まったということで引き分けくらいでしょうか。そして1位抜けの場合は900キロ移動してモスクワのスパルタク、さらに準々決勝も900キロ移動してサマラ、800キロ移動して準決勝

20		
日本代表の戦い		
2018年大会(グループH)		
6月19日	コロンビア@サランスク	
6月24日	セネガル@エカテリンブルク	1,010km
6月28日	ポーランド@ボルゴグラード	2,410km
7月3日	ラウンド16@モスクワ(スパルタク)	3,335km
7月7日	準々決勝@サマラ	4,206km
7月11日	準決勝@モスクワ(ルジニキ)	5,068km
7月2日	ラウンド16@ロストフ	2,807km
7月6日	準々決勝@カザニ	3,965km
7月10日	準決勝@サンクトペテルブルク	5,172km
7月15日	決勝@モスクワ(ルジニキ)	5,068 / 5,814km

はモスクワのルジニキになり、決勝もルジニキですので準決勝と決勝は移動距離なしです。もしもポーランドに負けてしまって2位抜けの場合はラウンド16のロストフまでの移動は400キロくらいですが、そこからが厳しくなります。カザニ、サンクトペテルブルクと1,000キロ以上の移動が続きます。準決勝のサンクトペテルブルクから決勝のモスクワまで700キロくらいあります。サンクトペテルブルクはロシアの海寄りの都市で旧ロシア帝国の首都でした。ソビエト連邦を建国した際に、首都がサンクトペテルブルクだとまたフランスが攻めてくる可能性がある、ということで首都を内陸地のモスクワに移転しました。最長で5,800キロの移動となりますので、行かれる方はどうぞお気をつけてください。

これまでの日本代表のグループリーグ3試合、すなわち2回分の移動はスライド18から20のとおりです。フランス、日本、ドイツという国土が広くない国での大会は少なく、広大な国土で行われたブラジル大会とロシア大会が非常に長いのがわかります。



18	
日本代表の戦い	
1998年大会(グループH)	累計移動距離
6月14日 アルゼンチン@トゥールーズ	
6月20日 クロアチア@ナント	470km
6月26日 ジャマイカ@リヨン	986km
2002年大会(グループH)	
6月4日 ベルギー@埼玉	
6月9日 ロシア@横浜	45km
6月14日 チュニジア@長居	431km
6月18日 トルコ@宮城	1,069km
2006年大会(グループF)	
6月12日 豪州@カイザーслаウデン	
6月18日 クロアチア@ニュールンベルク	242km
6月22日 ブラジル@ドルトムント	590km

19	
日本代表の戦い	
2010年大会(グループE)	
6月14日 カメルーン@ブルームフォンテーヌ	
6月19日 オランダ@ダーバン	474km
6月24日 デンマーク@ルステンブルク	1,082km
6月29日 パラグアイ@プレトリア	1,190km
2014年大会(グループC)	
6月14日 コートジボワール@レシフェ	
6月19日 ギリシャ@ナタール	247km
6月24日 コロンビア@クイアバ	2,776km

20	
日本代表の戦い	
2018年大会(グループH)	
6月19日 コロンビア@サランスク	
6月24日 セネガル@エカテリンブルク	1,010km
6月28日 ポーランド@ボルゴグラード	2,410km
7月3日 ラウンド16@モスクワ(スバルタク)	3,335km
7月7日 準々決勝@サマラ	4,206km
7月11日 準決勝@モスクワ(ルジニキ)	5,068km
7月2日 ラウンド16@ロストフ	2,807km
7月6日 準々決勝@カザニ	3,965km
7月10日 準決勝@サンクトペテルブルク	5,172km
7月15日 決勝@モスクワ(ルジニキ)	5,068 / 5,814km

21	
グループリーグ3試合における日本代表の移動距離	
1998年大会(フランス)	986km
2002年大会(日本)	431km
2006年大会(ドイツ)	590km
2010年大会(南アフリカ)	1,082km
2014年大会(ブラジル)	2,776km
2018年大会(ロシア)	2,410km

## 5. FIFA ワールドカップにおける各チームの移動距離

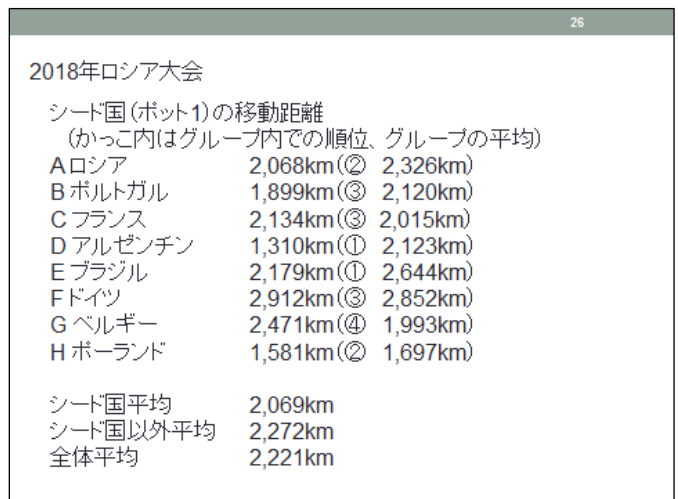
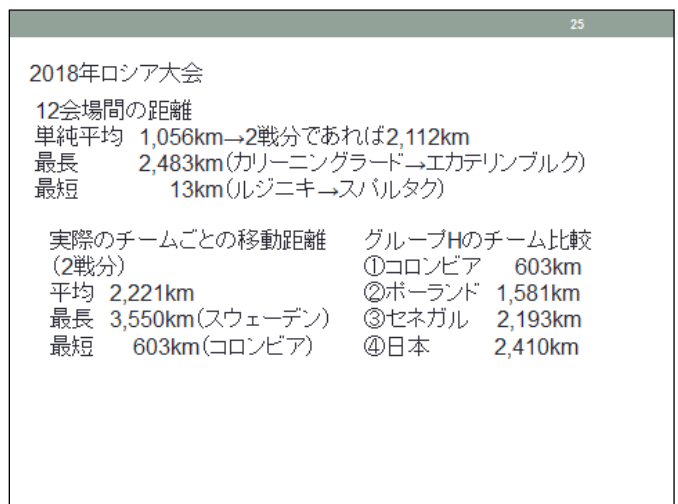
### 5-1. 2018年ロシア大会

それではこれが平均や他の国と比べてどうなのかを見てみましょう。最初はロシア大会です。ヨーロッパのフランスやドイツの面積と比べてみてください。カーニングラードは飛び地です。エカテリンブルクはウラル山脈の東側です。12会場間の平均距離、これは単純にエクセルで足して割っただけですが、1,056キロになります。最長はエカテリンブルクとカーニングラードの2,483キロ、最短はモスクワの2会場の13キロです。すなわちグループリーグでは平均で2,112キロ移動することになります。すべてのチームのグループリーグの移動距離を計算してみました。平均は2,221キロです。単純平均よりもちょっと多くなります。

移動距離が一番長いのがスウェーデン、一番短いのが我がグループHのコロンビアです。そしてグループHの4チームを比較すると一番短いのがコロンビア、次がポーランド、3番目がセネガル、一番長いのが我が日本です。これだけ長いのですから、万が一負けた際には言い訳になるかもしれません。こうなったのは付度があったとか監督の指示があったというわけではなく、こういう結果になりました。ただ、これが単純にこうなったのではないということをお話いたします。いろいろと面白いことがわかります。

ロシア大会のシード国8か国がどれだけの移動距離があり、それが各グループで何番目なのかをまとめたのがスライド26です。

こう見てみますと2番目とか3番目とか結構ばらついていることがわかります。アルゼンチンとブラジルは一番恵まれています。ベルギーは一番恵まれていません。シード国平均が2,069キロで、シード国以外の平均が2,272キロで、シード国のほうが恵まれていることがわかります。これを見る限り、何らかの意図があったようには思えません。つまり、恣意が働いていない、開催国もシード国もそれ以外の国もランダムに会場を割り当てられて、その結果としてばらつきが出ているといえます。

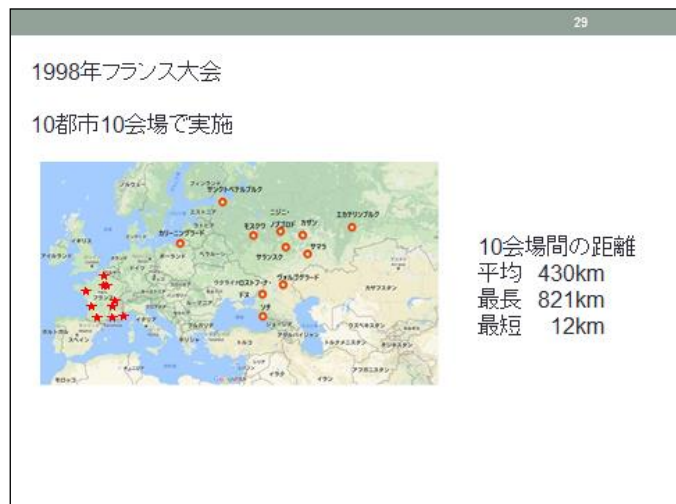


## 5-2. 1998年フランス大会

それでは、チームを移動させる現在の方式を最初に導入したフランス大会についてお話ししたいと思います。フランス大会は国内10会場で行われ、スライド29のような感じでした。10会場間の平均距離は430キロです。先ほど紹介したロシア大会は1,000キロ超ですからそれのだいたい4割くらいです。ロシアに比べれば小さい国ですから、そうだよ、という数字かと思います。最長は意外なことにランスとマルセイユです。サンドニのスタッド・ド・フランスとパリのパルク・デ・フランスで12キロでした。実際どうだったかというと全チームの平均移動距離は884キロで単純平均を2倍した860キロより少し長くなりました。移動距離が一番長かったのがデンマーク、一番短かったのがイランでした。

日本のいたグループHをみるとジャマイカが一番短く580キロ、続いてクロアチア、そして日本、アルゼンチンです。

シード国のアルゼンチンが一番長い距離を移動しているところに意味があります。この時はシード国はスライド31のとおり長い距離を移動していました。8つのシード国のうちグループ内の平均よりも移動が短かったのは平均と同じオランダを除いてありません。ポット1であるシード国の移動距離の平均は1,026キロで、シード国以外、ポット2以下の国の移動平均は837キロです。シード国の8か国はシード国以外の24か国に比べて2割くらい余計に移動しています。これはどういうことかということ、こういうシード国の試合をみんなが見たいわけです。したがって、シード国の試合をいろいろな都市、地理的に離れた都市で開催したわけです。売れっ子の歌手や芸人と同じです。みんなが見たい歌手は、ツアーで今日は札幌、明日は福岡、明後日は名古屋のように飛び回りますが、そうではない歌手は九州ツアーや京阪神ツアーで終わってしまいます。さらにこういうみんなが見たいチームはその国での期待も高いですからたくさんのファンがやってきます。そういう主要国から来てくれたたくさんのファンにフランスを周遊してもらい、観光収入を増やそうという意図もあるわけです。



30

1998年フランス大会  
10会場間の距離  
単純平均 430km→2戦分であれば860km  
最長 821km(マルセイユ→ランス)  
最短 12km(サンドニ→パリ)

実際のチームごとの移動距離 (2戦分)	グループHのチーム比較
平均 884km	①ジャマイカ 580km
最長 1,129km(デンマーク)	②クロアチア 755km
最短 293km(イラン)	③日本 986km
	④アルゼンチン 1,085km

31

1998年フランス大会

シード国(ポット1)の移動距離  
(カッコ内はグループ内での順位、グループの平均)

A ブラジル	1,044km(③ 979km)
B イタリア	979km(④ 844km)
C フランス	1,074km(③ 854km)
D スペイン	1,062km(④ 820km)
E オランダ	928km(② 928km)
F ドイツ	944km(③ 798km)
G イングランド	1,092km(④ 995km)
H アルゼンチン	1,085km(④ 851km)

シード国平均	1,026km
シード国以外平均	837km
全体平均	884km

フランス大会のことをまとめたのがスライド32で、見る側の負担を各チームが負担します。そしてその負担は開催国を含むシード国がより多くになっているということです。フランス語でいうところのノブレスオブリージュ、高貴なる責務という考え方です。貴族が重い荷物を持つというフランスの伝統です。これは前回のラグビーのワールドカップで選手がバラエティ番組に多数出演していました。テレビ出演にはいろいろな意見があるかと思いますが、選手たちは、自分たちはラグビー選手であるから練習をすることも必要だが、たくさんの人にラグビーに親しんでもらうために練習時間を削ってでもテレビ出演している、と言っていました。それと同じでサッカーのワールドカップもプロモーションのために各チームに移動を強いる、そしてその移動は人気と実力のあるシード国がより多くの距離を移動してもらう、という考え方です。イタリア大会まではシード国は1都市に居座っていました。ブラジルの場合はトリノ、トリノのファンはずっとブラジルの試合を見ました。普段ユベントスを見ている人にとってはどうだったのでしょうか。また、ヴェローナの人たちはベルギーの試合を3試合見ました。当時はFIFAランキングはありませんでしたから前回大会4位のベルギーがシード国になったのですが、当時エンゾ・シーフォのいたベルギーの試合をずっと見ていたヴェローナの人のことを考えればフランス大会の開催地の人は良かったのではないかと思います。フランス大会はそういう意味で革命を引き起こしたと言えます。

32

**1998年フランス大会**

各チームは論理的な平均値以上の移動をしている。イタリア大会まではシード国は移動なし、最も移動の多いチームでも近距離の都市の往復であったが、フランス大会では各チームは移動に多くの労力を要する大会になった。

シード国(ポット1)は移動距離に関してシード国以外よりも大きい。これはシード国は広いエリアのファンに試合を見てもらおう、多くのファンが来訪するシード国のファンにはフランスを周遊してもらおうという意図の表れと考えられる。

すなわち、見る側の負担を各チームが負担し、その負担については開催国を含むシード国が大きかった。ノブレスオブリージュ的な発想と考えられる。

### 5-3. 2002年韓国・日本大会

それでは 2002 年の日本開催はどうだったのでしょうか。日本の会場だけを分析しました。国内は 10 会場で行われたのですが、最長は札幌から大分の 1,385 キロです。先ほどお話ししたロシア大会の平均よりやや多い程度です。つまりロシア大会は札幌から大分とまでは行かなくとも、広島あたりの距離を毎試合移動することになります。一番短いのは神戸と大阪の 32 キロ、単純平均は 505 キロ、3 試合、つまり 2 回移動と考えれば 1,010 キロになります。



この大会の時は日本でグループリーグを行ったチームについて言うならば、グループ E から H でのグループリーグでの平均移動距離は 2 回分で 924 キロ、つまり論理的な平均値よりも 1 割ちょっと短くなっています。一番たくさん移動したチームはこの大会最大のスターであったベッカム様のいたイングランドで 1,870 キロでした。一番短かったのはクロアチアの 361 キロでした。

それでグループHを見てみますと日本が一番短いのです。430キロでどういう動線だったかという、まず埼玉スタジアム、そして横浜、最後に大阪の長居です。あとでもお話ししますが、開催国だけは抽選前にどことどここの競技場で試合をするかが先に決まります。当然、日本の場合ですと横浜、埼玉、大阪の3会場というのは妥当な選択かと思えます。ただ、この試合順が埼玉、大阪、横浜となるとこの移動距離が倍くらいになってしまいますが、埼玉、横浜、大阪が一番効率的に移動する順番です。

それではこの時のシード国はどうなっていたかを見てみますと、残りの3チームはたくさん移動させられていたのです。日本だけが移動距離が短かったのです。イングランドはこの時はシード国ではありませんでした。日本のようなケースはありましたが、この大会もフランス大会同様、シード国の方がシード国以外よりも多くの距離を移動していました。

またこの大会はラウンド16までの3試合を考えてみました。ドイツのグループE、イタリアのグループGは2位以内に入ると韓国で決勝トーナメントを戦います。一方アルゼンチンのグループFと日本のグループHは決勝トーナメントになっても日本に残ることになります。グループFとグループHは決勝戦までずっと日本国内で試合ができました。ですからベッカム様は決勝戦までずっと日本にいらっしゃることができたのですが、途中で帰ってしまいました。ドイツやイタリアは日本でのグループリーグで勝ち抜いて海を渡って決勝トーナメントを戦うことになります。

日本でグループリーグを行った16チームについてラウンド16までの移動距離を計算してみました。計算方法ですが、ラウンド16の部分は実際の結果ではなく、各チームが1位抜けになった場合と2位抜けになった場合のケースを平均しています。そうしますとシード国平均は1,741キロ、シード国以外の平均は1,586キロです。ちなみに日本国内に残ってラウンド16を戦うグループFとグループHについてはシード国平均が1,690キロ、シード以外の国の平均が1,147キロです。シード国についてはあまり違いがないことに気が付きます。これは決勝トーナメントを韓国で行うグループEとGのシード国のイタリアとドイツはグループリーグの3試合を東から西に移動するように設計されていたからです。大分からソウルに行くのと、成田に近い鹿嶋からソウルに行くのとどちらが時間的に近いか、という議論はあるかと思いますが、スタジアム間の直線距離について考えるならば、海を渡る移動が苦にならないような設計はされていたのかと思います。

35

2002年日本・韓国大会

日本国内10会場間の距離  
単純平均 505km→2戦分であれば1,010km  
最長 1,385km(札幌→大分)  
最短 32km(大阪→神戸)

実際のチームごとの移動距離 (2戦分)	グループHのチーム比較
平均 924km	①日本 430km
最長 1,870km(イングランド)	②ロシア 587km
最短 361km(クロアチア)	③チュニジア 752km
	④ベルギー 1,405km

36

2002年日本・韓国大会

シード国(ポット1)の移動距離  
(カッコ内はグループ内での順位、グループの平均)

E ドイツ	1,064km(④)	677km
F アルゼンチン	1,307km(③)	1,206km
G イタリア	1,664km(④)	1,018km
H 日本	530km(①)	794km

シード国平均	1,116km
シード国以外平均	860km
全体平均	924km

参考:ラウンド16までの3試合 (E,Gは日本国内を3試合換算)

シード国平均	1,741km (1,690km)
シード国以外平均	1,586km (1,147km)
全体平均	1,625km (1,283km)

37

2002年日本・韓国大会

各チームは論理的な平均値以下の移動をしている。フランス大会との大きな違いは共同開催であり、グループリーグと決勝トーナメントで国境を超えるグループが半数あった。ただし距離に関しては国境を超える方がやや長距離移動となるにとどまった。結果的には国境をまたいだチームが決勝戦を争った。(ブラジルは1回、ドイツは2回)

シード国(ポット1)は移動距離に関してシード国以外よりも大きく、フランス大会と同じ傾向となったが、開催国の日本だけは例外で移動距離が少なく、さらに決勝トーナメント1回戦まで勘案すると16か国の中で最も移動距離が少なくなる。

開催国の日本に有利な会場設定となった。



2002年大会のフランス大会との大きな違いはグループリーグと決勝トーナメントの間で国を越える国が出場国の半分が存在したことです。セネガルやデンマークはそうですし、日本が決勝トーナメントで対戦したトルコもソウルから移動してきました。結果的に決勝は国を渡ったチーム同士で行われ、ブラジルは1回、ドイツはグループリーグを日本、決勝トーナメントは準決勝まで韓国、そして決勝は日本と2回国境を越えました。そしてシード国がシード国以外より移動距離が長かったのはフランス大会同様でしたが、開催国日本だけが例外でした。また、先ほどグループリーグ3試合だけの移動を考えた場合はクロアチアが一番短くなるとお話ししましたが、決勝トーナメントの1回戦までの4試合分を計算すると日本が一番短くなります。クロアチアはグループリーグで敗退しましたが、決勝トーナメントは横浜からソウルまたは全州への移動となりました。ラウンド16まで考えると日本が圧倒的に移動距離が少なかったのです。

#### 5-4. 2019年ラグビーワールドカップ日本大会

ではここで話題を変えまして、来年日本でラグビーのワールドカップが行われます。去年この場で似たようなお話をしました。ラグビーのワールドカップは20チーム参加、12都市12会場で行いますから、日本で行われたサッカーのワールドカップは16チームが参加で考えられますので、サッカーのワールドカップに比べるとちょっと規模の大きな大会となります。



グループ5チームから形成されますので、グループリーグは4試合です。また12会場間の平均距離は574キロです。サッカーのワールドカップは505キロでしたか。ラグビーの場合は、九州3都市や釜石があり、サッカーのワールドカップよりも移動距離は長くなります。一番長い距離は札幌から熊本、一番短いのは味の素スタジアムの東京から日産スタジアムの横浜の19キロです。そして実際の移動距離、ラグビーの場合は4試合ですから3回分の移動ですが、一番長いのは豪州の2,214キロ、一番短いのが日本で483キロになります。日本の入るプールAを見てみますと、日本が一番短く483キロ、続いてロシア、スコットランド、アイルランド、プレーオフ勝者の順になります。ロシアについては先週まではルーマニアだったのですが、フェアネスがなかったためにロシアに入れ替わりました。そしてプレーオフのところはたぶんサモアが出てくるであろうと思われます。ただサモアも協会が内紛状態で、選手が流出し、実力はサモアですが、もしかしたらポルトガルになるかもしれません。(注：サモアとドイツでプレーオフを実施)

それでシード国、ラグビーの世界カップはバンド1と言いますが、ラグビーの場合は開催国シードはありません。世界ランキング順に1位から4位までがバンド1、5位から8位までがバンド2となり、バンド5まで単純に決めていきます。前回の2015年大会はイングランドが開催国としては初めてバンド2でした。スライド41のとおり、シード国、バンド1の国は結構長い距離を移動させられています。豪州もそうですし、ニュージーランドもそうですがプール内で一番多くの距離を移動しています。先ほど

サッカーの世界カップのフランス大会のところでお話したとおり、こういうチームはいろいろな場所の人に見てほしいわけです。イングランドもプールCの中では2番目に移動距離は少ないですが、1500キロ以上の移動をしています。バンド1の平均が1116キロ、バンド2の平均が1077キロ、そしてバンド3だけが3桁で848キロです。バンド4、バンド5も平均以上の移動距離となっていますが、なぜバンド3だけが移動距離が短いかお分かりでしょうか？日本が入っているからです。

移動距離の長短について並べたのがスライド42です。長い方では2,000キロ以上の国が2か国、短いほうではこのように3桁のチームが多数あります。統計学的に言えば、2つのものを足し合わせたばらつきよりも3つのものを足し合わせたばらつきのほうが小さくなるはずですが、ところが3つの移動を足し合わせたラグビーワールドカップは2つの移動距離を足し合わせたサッカーの世界カップよりもばらつきが大きくなりました。

40

2019年ラグビーワールドカップ日本大会

国内12会場間の距離  
単純平均 574km→3戦分であれば1,721km  
最長 1,364km(札幌→熊本)  
最短 19km(東京→横浜)

実際のチームごとの移動距離 (3戦分)	プールAのチーム比較
平均 1,237km	①日本 483km
最長 2,214km(豪州)	②ロシア 733km
最短 483km(日本)	③スコットランド 843km
	④アイルランド 878km
	⑤プレーオフ勝者 1,248km

41

2019年ラグビーワールドカップ日本大会

シード国(バンド1)の移動距離  
(カッコ内はグループ内での順位、グループの平均)

A アイルランド	878km(④)	837km
B ニュージーランド	1,770km(⑤)	1,141km
C イングランド	1,506km(②)	1,571km
D 豪州	2,214km(③)	1,398km

バンド1平均	1,116km
バンド2平均	1,077km
バンド3平均	848km
バンド4平均	1,208km
バンド5平均	1,458km
全体平均	1,237km

42

移動距離長い国と短い国に二極化

移動距離の長い国

豪州	2,214km(札幌→東京→大分→静岡)
トンガ	2,037km(札幌→東大阪→熊本→東大阪)
フランス	1,814km(東京→福岡→熊本→横浜)
ニュージーランド	1,770km(横浜→大分→東京→豊田)
米国	1,697km(神戸→福岡→熊谷→東大阪)
フィジー	1,576km(札幌→釜石→東大阪→大分)
イングランド	1,506km(札幌→神戸→東京→横浜)

移動距離の短い国

日本	483km(東京→静岡→豊田→横浜)
南アフリカ	565km(横浜→豊田→静岡→神戸)
ロシア	733km(東京→熊谷→神戸→静岡)
アルゼンチン	800km(東京→東大阪→東京→熊谷)
アフリカ第1	824km(東大阪→豊田→東京→釜石)
ジョージア	832km(豊田→熊谷→東大阪→静岡)
スコットランド	843km(横浜→神戸→静岡→横浜)
アイルランド	878km(横浜→静岡→神戸→福岡)

日本の場合は東京→静岡→豊田→横浜という移動です。この4都市間の移動で最も移動距離が短くなるのは東京→横浜→静岡→豊田ですが、行ったり来たりがあまりなく移動の負担が少なくなるように設計されています。一方、豪州は札幌→東京→大分→静岡というルートです。サポーターの人はさぞかし楽しいでしょうね。トンガも札幌→東大阪→熊本→東大阪、花園のある東大阪そのものは普通のベッドタウンですが、大阪は楽しい町ですから、楽しいジャパンライフが過ごせるのではないかと思います。フランスは福岡と熊本を回り、京阪神地区での試合がありません。京阪神地区は外国人にとって魅力的な観光スポットの多いエリアですが、フランス人は日本にたくさん来ているから、京阪神はもういいのかな、とも考えられます。観光誘引と言う点では本当は東大阪とか神戸での試合を置いておきたいのです。日本は観光をする必要はありませんので、東京→静岡→豊田→横浜というルートになっています。こういう町に行っても何もないですよ。自動車工場の見学をするということもありますが、日本人は小学校の社会科見学で見学済みですよ。

さらに移動だけではなく、試合間隔の面でも開催国日本は優遇されています。サッカーの場合、中3日とか、中4日で試合を行い、グループリーグの最終戦の時に勝って1位になれば中4日、引き分け以下で2位になった場合は中3日というような場合、駆け引きを行うと言うケースがあります。ラグビーのワールドカップは試合間隔がまちまちなのですが、その中ですべての試合を中5日あるいは中6日で行うチームがあります。中5日は日曜日に試合をやってその次の土曜日に試合をするケースです。中5日あるいはそれ以上のほぼ1週間おきにすべての4試合を行うのは日本、トンガ、豪州、アフリカの4チームです。それ以外の16か国は中3日や中4日の試合もあります。

さらに中3日の試合が2回もあるチームがあります。スコットランドです。スコットランドの2回目の中3日の試合の相手は日本です。これはどういうことかという日本側のプールの最終戦はスコットランド戦です。順当に行くとこのプールで力がぬきこんでいるのはアイルランドです。日本もスコットランドもアイルランドに敗れた以外は全勝して、2勝1敗同士で最終戦で直接対決、ここで勝利したほうが決勝トーナメントに行くことができる2位争いとなるわけです。スコットランドは日本の前に戦うロシア戦はBチームを出してくると思いますが、

さらに中3日や中4日で試合をする国、すなわち疲れている国と2回試合をする国があります。それが日本とウルグアイと世界最終予選です。ウルグアイ、世界最終予選のチームはこのようなアドバンテージをもらっても勝利は難しいです。ところが日本にとってこの日程は有利に作用します。中3日や中4日で日本と対戦するのがスコットランドとサモア(たぶん)です。こういう力関係であれば中3日や中4日は大きなアドバンテージとなります。これがアイルランドが相手であればそうは行き

43

試合間隔についても優遇されている日本

ほぼ1週間おき(中5日以上)の日程の国は下記の4か国のみ  
日本(A 金、土、土、日)、アフリカ(B 日、土、日、日)  
トンガ(C 日、土、日、日)、豪州(D 土、日、土、金)  
それ以外の16か国は中3日、中4日の試合がある

中3日の試合が2回ある国  
スコットランド 9月22日(アイルランド)→9月26日(プレ-オフ)  
10月9日(ロシア)→10月13日(日本)

中3日・中4日の相手と2回試合のある国  
日本 10月5日対戦のサモアは9月30日にスコットランドと対戦  
10月13日対戦のスコットランドは10月9日にロシアと対戦  
ウルグアイ  
9月25日対戦のフィジーは9月21日に豪州と対戦  
10月13日対戦のウェルズは10月9日にフィジーと対戦  
世界最終 9月26日対戦のイタリアは9月22日にナミビアと対戦  
10月8日対戦の南アフリカは10月4日にイタリアと対戦

44

2019年ラグビーワールドカップ日本大会

会場間の単純な平均距離は574kmであり、2002年FIFAワールドカップ(505km)よりも長かったが、実際の移動距離はサ1試合平均で412km(2002年は462km)であり、かなり短く設定された。

これは競技特有のリカバリーが必要で移動による疲労を避けたいこと、予選プールが奇数チームで行われるために日程的にイレギュラー(中3日など)なチームができることから、短距離の移動を多く設定していることが原因である。

特に開催国の日本は移動距離だけでなく、試合間隔についても他の国よりも有利に設定されている。

ません。中3日だろうが中1週間でも勝てません。中100年でなければアイルランドには勝てません。

来年のラグビーワールドカップについてまとめてみましょう。まずいいところは、会場間の単純な平均距離は574キロであり、サッカーのワールドカップの505キロよりも長かいのですが、実際の移動距離は1回平均で412kmであり、サッカーのワールドカップの462キロよりも50キロくらい短く設定されたということです。これはどのような設計をしているかという点と先ほどのフランスの例です。福岡に行ったら次は中3日で短距離移動して熊本で試合を行います。このように試合間隔が短い場合の短距離移動が多く設定されています。サッカーに比べればリカバリーが必要なスポーツですので、移動による疲労を避けたいこと、予選プールが奇数チームで行われるために日程的に中3日などのイレギュラーなチームができることから、そういうことをうまく利用して短距離の移動を多く設定していることが原因になり、開催国の日本が有利になるような日程になっています。

## 6. ワールドカップにおける組み合わせ・日程・会場決定のプロセス

なぜ、このようなことになるのかをまとめてみましょう。

### 6-1.FIFA ワールドカップの日程の決定プロセス

FIFAのワールドカップについては出場国が3つのカテゴリーに分かれています。まず開催国、それから開催国以外のシード国、それからその他の国です。

開催国については抽選をする前の段階で何月何日にどこの会場で試合をするかは決まっています。例えば2002年の日本の場合、6月4日に埼玉スタジアム、9日に横浜国際、14日に大阪の長居というところが決まっていました。またシード国もどの会場ですべて試合をするかが決められており、グループBに入った場合はいつどこで試合をするかがあらかじめ決まっています。ですから、開催国やシード国という人気のあるチーム、多くの人が見たいチームはその会場を全国各地の収容人員の多い会場に設定することができるのです。そして逆に開催国だけ恵まれた条件にすることも可能です。今回のロシア大会では日本はH-4になっています。今回のFIFAワールドカップはラグビーのワールドカップ同様に実力順、すなわちFIFAランキング順にシードを決め、日本は残念ながら第4シード、ポット4となりました。だからH-4に入っていると思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、第2シード以下はランダムです。たまたま日本はH-4に入っています。同じ第4シードの韓国はF-4ですが、サウジアラビアはA-2です。

このようにして、開催国、シード国の試合をいつどこで行うかと言うことをより多くのファンに見てもらおうようにすることができたと言うわけです。

46

6-1. FIFAワールドカップの日程の決定プロセス  
あらかじめ日程(会場、日時)を決めておき、その後抽選を行う。

抽選は「シード国である開催国(1チーム)」「開催国以外のシード国(ポット1)(7)」「シード国以外(ポット2から4)の国(24)」の3つに分けて決定される。

各グループでは「シード国」の会場と日時はあらかじめ決定している。  
また、「開催国」の入るグループはあらかじめ決定しており、抽選会ではそれぞれの試合の「対戦相手」のみが決まる。

したがって、フランス大会のように「シード国」は長距離移動により「国内全土」で試合をするということが設定可能。  
逆に日本大会のように「開催国」のみ移動を抑制することも可能。

48

有力国優先の大会運営を行うラグビーワールドカップ

試合間隔と対戦相手  
有力国は試合間隔がほぼ均等、中3日の場合は下位国と対戦する。  
→リカバリーの必要な競技であり、コンディショニングに有利  
→観戦者もテレビ観戦が習慣化

大規模な競技場  
有力国の試合は「大規模な競技場」で行われる。  
→入場料収入の増大  
→有力国の試合を見たいというファンに対応

自国でのテレビ視聴者向けの試合日程  
有力国の試合は現地だけではなく、時差を考慮した自国でのテレビ観戦にふさわしい曜日・時間に行われる。  
→現地観戦者増えるか以上に上回る数のテレビ観戦者に対応  
→放映権料ビジネスの促進



## 6-2.ラグビーワールドカップの日程の決定プロセス

一方、ラグビーのワールドカップについてはこれとは違い、まず抽選でグループ分けをします。まだこの段階では予選中で出場国は全部は決まっています。そのグループ分けの後、半年くらいかけて会場と日時を決めていきます。この会場と日程の決定に関しては、会場の収容人員、時差のある各国でのテレビ観戦などを勘案して決定していきます。日程について、どうということかという、例えば、欧州の人気チーム、イングランドやフランスなどの試合については土曜日や日曜日の夜に行います。そうすると自国、すなわち欧州では土曜日や日曜日の午前中や昼間になるわけです。また人気チームは大きなキャパシティのある会場で試合を行います。逆に釜石や花園のような小さな競技場には人気チームは来ないというわけです。

こういうことで、有力国のファンを重視した日程であるということです。そして開催国が競技面でも有利になるような日程決定ができるというわけです。サッカーの日韓大会に続いてラグビーのワールドカップも開催国有利な日程にしたと言うことです。

試合間隔であったり、大規模な競技場を使用したり、自国のテレビ観戦にキックオフを合わせるなど、有力国や開催国中心の日程決定を商業主義の中で行っているということです。

スライド47にまとめていますが、ここまできると最近はやりの表現で言うならば「競技そのものが曲げられてしまった」と言えるのではないかと思います。

## 7. ワールドカップにおける「フェアネス」を考えるーディスカッション

井上：ここで皆さんにワールドカップにおけるフェアネスと言うものはどういうものなのかな、と問いかけたいです。

ラグビーのワールドカップは「4年に一度ではない、一生に一度だ」と宣伝していますが、こんなことをしていたら、もう二度と日本人にはワールドカップを開催させるな、ということで本当に一生に一度になってしまいます。

今回のラグビーのワールドカップの日程をFIFAが見れば、日本人はあんな国民だったのか、ランキング60位台だから許してあげるけどさ、と思うわけです。1998年大会に初出場を果たし、我々日本人はワールドカップを実体験するようになりました。ちょうどその大会から新しい現在の方式が導入されました。2002年の自国開催、そして2019年のラグビーのワールドカップ、これらのグループリーグについてはこれまで話してきたとおりですが、皆様はこれをどう思われているのか、ぜひともご意見をいただきたいと思います。以上で私の話を終わります。どうもありがとうございました。

中塚：懐かしい話もいっぱい出てきました。1998年、トゥールーズのイングランド vs ルーマニア戦はスタジアムで観戦しました。今度行かれる方も長い距離を移動されるかと思います。ここまでの話で質問などありましたら、ざっくばらんをお願いします。

47

6-2. ラグビーワールドカップの日程の決定プロセス  
抽選でグループ分けを行ってから、日程(会場、日時)が決まる。

日程(会場、日時)の決定に関しては、会場の収容人員、時差のある各国でのテレビ観戦などを勘案して決定する。これらは「有力国」を重視して決定される。(日程決定段階で予選中のチームもあるが、有力国ではない。出場国が決まっていない段階でチケットが販売開始される)

したがって、有力国のファン(現地観戦&テレビ観戦)を重視した日程(会場、日時)となる。

予選プールのチーム数が奇数→試合間隔にばらつきが出る。

したがって、日本大会のように「開催国」が有利となるような日程(会場、日時)を設定することもできる。



## 1) 移動の問題①—競技成績とキャンプ地

参加者：移動と成績の関係はどうなっていますか？

井上：移動距離が多いチームはシードが多いのでいい成績を残しています。後これで抜けているのが、サッカーの場合、中3日と中4日などラグビーに比べれば間隔が短いです。ですから、中3日と中4日の1日の違いと言うのはすごく大きいと思います。今後のことを考えるならば、何キロの移動が試合間隔1日分の休息に相当する、と言うことを定量的に求めていくことは身体科学的には価値のあることだと思います。

参加者：キャンプ地についてはどうですか？

井上：キャンプ地は自分たちで選ぶことができるので考慮しませんでした。またキャンプ地についてはチームによっては大会が始まると会場の近くに移動するところもあります。

中塚：今回のロシア大会では日本は3会場の中間地点でキャンプを行いますね。

参加者：カザニです。

井上：試合はサランスク、エカテリンブルク、ボルゴグラードとモスクワよりも東側で行います。そんな遠く感じませんがフランスの地図と比較するとよくわかります。

12会場を選ぶのは距離を考慮しなくてはなりませんね。

大昔の話をする、1966年のイングランド大会では優勝したイングランドはグループリーグ3試合、決勝トーナメント3試合の合計6試合、全部ロンドンのウェンブリーで試合をしていました。今考えてみるとめっちゃくちゃだったわけです。イングランドが優勝しました、ジェフ・ハーストの疑惑のゴールがありました、に加えて、私たちの代表の北朝鮮が大健闘しました。実はあの大会で北朝鮮はグループリーグは全部ミドルズブラで試合をしていました。そして決勝トーナメントでエウゼビオのポルトガルに敗れるわけですが、この時に北朝鮮はミドルズブラからリバプールに移動しています。そしてポルトガルはグループリーグからリバプールに居座っていたのです。このように考えると移動しないことは有利に働くのではないかと思います。

今はこのようにぐるぐる試合ごとに移動しなくてははいけませんので、これをどのように公正にプログラムを組んで行くのか、まさにAIか何かによってやらせてもらわないといけないですね。

あとはファンが移動する楽しみをもつということはワールドカップとしては大きな要素です。

## 2) 移動の問題②—距離と時間

参加者：私はよく飛行機に乗るのですが、フェアネスというこの話で思ったことは距離もそうですが、かかる時間が距離では測れない面倒くささがあり、例えば甲府に行く場合と福岡に行く場合はどちらが楽かという圧倒的に福岡に行くほうが楽です。福岡は遠いのですが、飛行機で行くと1時間40分、かつ空港から町が近いです。あとは自動車で行くことができるのか飛行機で行くことができるのか、ということがあります。先ほどの話で大分から静岡の移動がありましたが、大分→静岡が最低だと思うのは、大分から東京に来てまた静岡に戻るのです。そういうことを考えると距離はもっと長くなるのではないかと思います。

井上：その通りです。本当はそこまで考えないといけないですね。本当は外国にも路線検索のサイト

があり、それを利用しようと思ったのですが、ちょっと大変だな、と思ってそこまでしませんでした。しかも、大分と言っても大分の競技場は私は行ったことはなく、うわさでしか聞いたことがないのですが、非常に環境のいいところにあるとのこと。地下鉄の茗荷谷からも護国寺からも来られるというような立地とは違うわけです。ただ、アクセスについて考えるならば4年に1度のお祭りだからどんな環境でもいいではないかという考え方もあります。地元もそれなりに体制を組むでしょうから。普段、2週間に1回ホームゲームを行うというのとは違う動線を海外からのサポーター向けに考えなくてはならないでしょう。日本人がヨーロッパのビッグゲームやバルセロナとかレアル・マドリッドの試合を見に行くことはよくあると思いますが、日本のJリーグにも中国や韓国からの観光客が観戦に訪れているのでしょうか？

参加者：Jリーグはないでしょうね。タイなどではテレビ中継しているようですが。

井上：この前聞いてびっくりしたのですが、今、国技館で大相撲やっていますね。チケット販売の3割は外国人とのことです。日本相撲協会の法被を着た受付の人は非常に上手に英語を話せますし、売店のお姉さんも流暢な英語をしゃべります。場内アナウンス以外は全部英語で書かれています。観光客を誘引する力が相撲にはあるのですが、Jリーグはそうでもないようです。しかしワールドカップには確実にあります。そういう点で行くとある程度の移動を作ったというプラティニの英断というには確かだったのかな、と思います。ワールドカップをサバイバルさせるために彼が行ったことは、彼はその後はいろいろとありましたが、間違っていない気がします。日本代表は移動のあるワールドカップしか経験していないわけです。もしも1966年のイングランド大会に出場していれば、3試合すべてミドルスブラで試合を行っていたわけです。釜本邦茂の時代ですね。

### 3) 移動の問題③—環境の変化

参加者：ロシアの大会で行くと気温差が会場によってあるのではないのでしょうか。

井上：その通りです。南アフリカ大会が一番いい例ですが、気温差に加え、高度差もありました。これは研究事例で見つけたのですが、さきほど笹原さんから質問のあったように高地と低地でそれぞれを評価しているレポートを見つけました。高いところに行ったり低いところに行ったりしているチームは不利だったということです。高いところに行ったときに強いチームとあたるとだめだった、ということが書かれています。

参加者：例えば、暑いところの国のチームを寒いところで試合をさせるとか。

井上：そういうことをやろうと思えばあからさまにできるわけです。そう考えてみるとサッカーの世界で普及しているホームアンドアウェーというのはフェアな世界だと思います。最近はやらなくなりましたが、野球でも日本シリーズは昔はセ・リーグの本拠地の試合では指名代打制を採用せず、パ・リーグのホームゲームでは指名代打を採用していました。中塚先生からうかがったのですが、デュアル・コードというそうです。ホームアンドアウェーで場所も違うし、ルールも違う、という中で試合を行っているわけです。

ワールドカップというのは究極のセントラル方式ですから、その中において今日お話ししたことをどのように担保していくかということは大きな課題になると思います。次回のカタールは幸か不幸かこのような心配はありませんが。

中塚：強化の観点からみると、ワールドカップではものすごい距離を移動しながら中3日とか中4日で試合を行うわけです。そういう経験をあらかじめしておく必要があるということで、日本代表戦の組み方も工夫しています。国内で試合をして、移動してシンガポールでブラジルと試合をして、という感じで。あれくらいの距離をブラジル大会では移動していたわけですね。

井上：4年に1回だけなんです。サッカー選手がチームとしてこれだけ移動しなくてはならないのは。4年に1回、トップレベルのサッカー選手はこんな無茶をさせられるわけです。

中塚：こう見てみると、ロシア大会では極東の会場がなくてよかったですね（笑）。

参加者：ずっと日本はウラジオストックでやるとか。

参加者：そうそう。

#### 4) 移動の問題④ーチケット

井上：有名な話が米国大会のイタリアの会場が意図的にイタリアの移民が多いところで試合をやったということがあります。商業的な観点ですね。イーストラザフォードというのはいわゆるジャイアンツスタジアム、ニューヨークジャイアンツですね。初めて人工芝の上で試合を行ったというケースです。イタリアはそういうことで移民が多い都市で試合を行い、たまたまこのグループEにはアイルランドもあり、アイルランド移民の多いニューヨークで試合をしました。

あとイタリア大会のアルゼンチンのナポリだけではなく、西ドイツのミラノも同じような理由があります。この時のインテルミラノには西ドイツ代表のマテウスとミュラーとクリンスマンが所属したので、西ドイツがミラノで試合をすることになったという話を聞いたことがあります。まあ、このくらい昔の話になってくると先ほどのイングランド大会ではありませんが、かなり恣意的に会場を決めていました。イタリア大会などはテレビご覧になった方は分かると思いますが、会場はガラガラでしたね。セリエAの試合を日頃見ている人にとっては試合のレベルが低かったのでしょうか。それが反省につながったわけです。どうすればプロモーションできるのか、ということで1998年大会からワールドカップは大きく変わったわけです。見る側にとっては楽しくなりましたが、やる側にとっては中塚先生からお話があった通り、たいへんな大会になってしまったわけです。

参加者：チケットが昔の方が入手が難しかったのかと思います。現在は自国に住んでいる人だけではなく、自分のチームを応援するために世界からワールドカップに行くことができるようになりました。

井上：例えば、ウディーネに住んでいる人がウルグアイー韓国戦を見たいと思いますか？

参加者：そうですね、商業ベースで成功させようという原動力が実は逆にいいということがあるかもしれませんね。

井上：これをやっていなかったら、昔のままの形式を続けてきたら、コロンビアーUAE戦をどうしようということになってしまっているわけです。

日本大会はチケットが全部売れたと思いますが、チームの移動をうまくさせてなかったら、チケットは売れたでしょうか。大分の人はずっとカメルーンの試合を見続けていたらどうでしょうか。

参加者：この時に日本人は自分の国と全く関係ない国の選手を応援するということが指摘され、奇異に思ったのですが。

井上：そうです。奇異ですし、世界ランキングの60位の国にとっては上位の国を見るということもあったかと思います。そういう点で怖いのは来年のラグビーワールドカップです。日本は世界ランキング11位か12位ですから、偏差値50くらい。そうするとアメリカ・フィジーとかジョージア・アフリカ第1代表とか、そういう試合をどれだけ日本人が見に行くでしょうか。私もチケットを購入しましたが、ビッグゲーム中心でした。東京や横浜は有力国や開催国の出る試合だけしか行きません。東京で国立の総合大学に行こうと思ったら東大しかない、というのと同じです。イングランドとかフランスの試合ばかり申し込みました。1つくらい滑り止めの試合を考えなくてはいけない、と言って購入したのが熊谷のアルゼンチン-米国戦でした。平日の真昼間の試合、3000円のチケットでしたが、誰も手をあげなかったのでしょうかね。

参加者：アイルランドの試合も地方の試合はグリーン（残席多数）ですね。

井上：そうです。ラグビーのワールドカップの場合、日本よりも格下のチームの試合を地方都市で行うということが危ないと思っています。ラグビーの場合はやる前から結果がわかってしまう試合が半分くらいありますので、ファンの方はいいですが、見てみようかな、という思う人にとってはつらいですね。

##### 5) 2019 ラグビーワールドカップの組合せとチケットティング

参加者：釜石のアフリカ第1代表の試合は何人くらい入るんでしょうね。

井上：そうなんです。ラグビー好きな人はいいのですが、釜石に住んでいる人がちょっと見に行こうかな、と言って見に行くようなカードではないと思います。2002年のサッカーワールドカップの時は基本的には格上のチームばかりでしたから、普段から見ているJリーグより1つ上のものを見ようとなりましたが、ラグビーの場合はかなりの試合がそうではないですね。WBCという野球の大会があります。夜は日本戦が組まれていて東京ドームが満員になるのですが、昼はいわゆる裏の試合、日本の出場しない試合を行っています。2,000人くらいしか観衆はいません。見に来ている人の中には日本代表のスタッフもいて、すぐ近くには山本浩二がいたこともあります。野球というメジャースポーツでもこういう状況です。日本戦しか見に来ないという状況で、日本は本当に大丈夫かなと思います。どんなスポーツでも楽しめるという文化を作っていくというのはこのサロン2002の目的でもあると思います。そうすると平日の昼間という時間的な問題はありますが、あの東京ドームで台湾-キューバ戦がガラガラというのがガクッと来ます。ましてやオランダ戦あたりになると関係者しかいません。バレンタインもこんなに観客のいないところで試合をするのは初めてでしょう。今後日本で言うメガスポーツイベントは2019年のラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピック・パラリンピックまでですから、若い人は別として私の世代にとっては日本にはもうメガスポーツイベントは来ませんから心配しなくていい、という考え方もありますが、日本人としてこんなことやっていて本当にいいの、と心が痛みます。

参加者：ラグビーのワールドカップの日程は開催国、日本サイドが決めたものでしょうか。

井上：日本人だけではありませんが、組織委員会が決めた、つまり日本人が主になって決めたという

ことです。ラグビーの場合は全試合の日程、会場をコントロールすることができますが、サッカーの場合は、開催国、シード国、それ以外というくくりまでしかコントロールできません。ロシア大会の場合は、日本は長い移動になりますが、たまたまその3つのグループに差がなかったということです。あの方式もかなりこなれてきたのかなと思います。

参加者：抽選をガラガラやる時に、あれを作為的に行うという話を聞いたことがあるのですが。

井上：よく昔からその話は聞きますが、抽選は作為的にはできないという前提でお話ししています。

参加者：抽選のボールに温かいのと冷たいのがあってそれで識別するらしいですが。

井上：そういう噂はよく言われていますが、それは弱いチームと戦うことが目的ですよ。

この話は特定のチームが勝つのを目的としているのではなく、大会をどうやってショウアップしていくかが主題です。ラグビーの方は完全に人気チームは大きな競技場で行い、アフリカ代表などになると小スタジアムで試合を行います。アフリカ代表も味の素スタジアムで試合を行います。これはニュージーランド戦です。有力国は大きな競技場、有力国以外は小さな競技場、これはある意味フェアな考え方です。

参加者：チケットの値段はどうなっていますか。

井上：チケットも会場と同じような考え方です。例えばサッカーの世界カップの場合は開幕戦を除くとグループリーグは全部同じチケット価格です。しかし、ラグビーの場合は人気チームの出場する試合とそうではないチームの出場する試合では価格が違います。さらに会場によっても価格が違います。同じスコットランド戦であっても横浜の試合と神戸の試合では価格が違います。箱が大きければ大きいほどチケットの価格は高くなります。さきほど釜石ではチケットが売れないのではないかと心配されていましたね。釜石の試合が空っぽになると、有力国同士の試合で5パーセントの空席が出るのが同じくらいの影響になります。

## 6) ラグビーワールドカップの財政問題

中塚：たしかラグビーの世界カップでは、開催国はあらかじめ相当な金額の“上納金”をワールドラグビーに支払わなくてはなりませんよね。それを回収する唯一の方法が観客からの入場料収入ですよ。

井上：開催国にお金が入ってくるのはゲートマネーと言われる入場料収入だけです。テレビ放映権やスポンサー収入は入ってきたとしても国によって軽重があるかもしれませんが、20分の1です。そうすると釜石の試合は有力国以外が行い、有力国、人気チームは大きな競技場で試合を行い、チケットの単価を高くする、という考えに落ち着きます。

恐ろしい話ですが、今回釜石で行う試合の一番安い席はトップリーグの一番安い席より19円だけ高い2019円です。決済はクレジットカードですから問題ないと思いますが、会場で2019円集金したらほとんどPTAの集金状態になります。

参加者：釜石は交通費がかかりそうですね。



井上：本当は地元の人に見てほしいです。またラグビー好きが全国集まるとい形になるでしょう。釜石に釜石シーウェイブスというチームがありますが、そこ練習試合をするのは宿泊の関係で難しいとのこと。練習試合ですから、観戦者はほとんどいません。しかしながらチームのスタッフの宿泊場所だけで苦勞するようです。そういうインフラ作りは今回のロシア大会でも話題になっていますが、開催国の責務です。

参加者：今の段階でチケットはどのくらい売れているのでしょうか？

井上：非公開です。野球とかコンサートはチケットに関してかなり情報が公開されています。それに比べればラグビーは情報公開が遅れていると思います。

それからすごい話ですが、ラグビーのワールドカップは当選してもお金を払わないで権利を放棄できます。いまだきこんなチケットティングしているのではないと思います。

参加者：払うまでに時間が相当ありますよね。

井上：払わなければそこで流れてしまいます。普通は抽選時にクレジットカードの番号を入力して、当選したら無条件でクレジットカードで決済され、支払うことが義務付けられていますが、ラグビーのワールドカップはマスターカードがスポンサーであるにもかかわらず、当選してからクレジットカードの番号を入力することになっています。

したがって、家族や知人を使って複数申し込み、複数当選した場合は支払わずに権利を流してしまうということが起こります。これはフェアではありません。

参加者：どれだけ売れているかわからないですよね。

井上：その通りで、開示したらチケットティングのミスをさらすことになってしまいます。日本戦と決勝以外は外した人を私の周りでは聞いたことがありません。

参加者：当日券はありますか？

井上：わかりませんが、あと1年半ありますから。

現在チケットは早く買えば早く買うほど高くなっています。つまりロイヤリティのある顧客は高い価格を出しても先行予約でチケットを入手します。先行予約の場合はサービス料のような形でチケット代に割増しをします。チケットの価格はメンバー限定の先行予約が一番高く、それから一般の先行予約、続いて一般販売の順に安くなってきます。これはヨーロッパのチケットティングも同様です。すなわち、予約料をチケット代に上乘せしているのです。あなたのためにチケットを前もってチケットをキープしているのだから、ということで予約料を取っています。

高くても買いたい人が早期に高い金額で入手することは、ネットオークションで高く買うよりは健全です。また、価格を下げっていくということは転売防止にもなります。早めに買った人は高く買いますが、転売しようと思ってもチケットの販売価格が下がるというデフレになっているので、逆ザヤが生じてしまい、売ることが難しくなります。

そういうノウハウが一般的になっているのに、ラグビーのワールドカップはそういうチケットティングをしていません。よほど自信があるのでしょうか。

参加者：チケット以外にテレビ放映権やスポンサー料収入があるはずですが。

井上：テレビ放映権料やスポンサー料収入は国際競技団体であるところのワールドラグビーに入り、日本にはその分配金がどれだけ来るかわかりません。

日本のテレビ局も放映は地上波ではなく衛星波を考えているようです。

ただ、日本が勝つように作られているので盛り上がるようになっていきます。これだけやって勝てなかったら残念ですね。

参加者：ワールドラグビーがやる気がないんじゃないですか？

井上：これよりもはるかに盛り上がるシックスネーションズとかありますからね。全日本大学駅伝よりも関東学連の箱根駅伝の方が盛り上がるのと同じです。

FIFAのワールドカップもそうですが、ちょっと油断したらチャンピオンズリーグと力関係が変わります。チャンピオンズリーグの場合はUEFAという別の団体が行っています。FIFAはどうやってワールドカップをサバイバルさせていくかを真剣に考えている団体かと思います。

## 7) 2018FIFA ワールドカップ・ロシアを現地で楽しむ人たち

中塚：ちなみにロシアに行かれる方のスケジュールはどうなっているのでしょうか。

参加者：セリエの場合はサランスク、エカテリンブルク、ボルゴグラードに加えてモスクワかロストフドナヌーという行程です。横移動ができなくて1回モスクワに戻って次のところに行くようになっています。Z攻撃が続く感じです。

参加者：私は移動のことを考えて全部で2週間の行程を組みました。カザン、モスクワ、サンクトペテルブルク、モスクワというルートです。

今回ファンIDを取得すると電車に無料で乗ることができます。

参加者：FIFAのサイトを見て、見る試合をチェックするとどのような列車に乗るべきかを示してくれます。日本の場合だとモスクワからどの列車でサランスクにどう移動するか、次のエカテリンブルクにはどの列車に乗ればいいのか分かり、公共交通機関に無料で乗ることができます。ただし、モスクワからサランスクの移動は電車に乗っているだけで12時間です。超特急ではないのです。急行列車のような感じです。

井上：今回の過去の大会を調べていて感じたのですが、どうしても移動の際はロシア大会のモスクワに相当するハブが必要です。ハブを経由してZ攻撃を続けていくわけですが、今回のロシア大会、南アフリカ大会、フランス大会はこのハブに相当する都市周辺に2会場があります。つまりハブのところでは他都市の2倍の試合を行い、実質的な移動距離を抑制することになっています。1966年のイングランド大会もロンドンにはウェンブリー以外にホワイトシティという1908年のロンドンオリンピックのメイン会場を使っています。ハブとなる都市に会場を設けると移動の負担は軽減されると思います。

## 8) 感想

中塚：ということで話は尽きませんが、場所を変えて続けていきたいと思っています。その前に、本月初

参加の方が2名いらっしゃいますので感想を伺いたいと思います。

霧島：貴重なお話しありがとうございました。距離と勝敗という観点は凄いと思いました。私もブラジルに行きましたが、とんでもない距離でサンパウロからフォルタレザまで移動したのですが、普通に移動するだけでつらい距離で、これで試合やったら大変だろうな、と感じました。また違った見方が今回見えて、プロモーションとかビジネス的なものが生き残るのは必要なんだと感じました。国内に来た観光客を回すというのはその国にとっては一世一代のことで、その国の死活問題で、今まではサッカーのことしか頭にありませんでしたが、違う見方ができてよかったです。

佐藤：今日はありがとうございました。自分は19歳でロシア大会に行かないのですが、友人がロシア大会に行くのでこのように動いていくのを聞いて大変そうだなと思いました。また商業的な面を考えなくてはならないところもあり、フェアネスという点もあり、いろいろな複雑な問題を簡単には解決できないと感じました。ありがとうございました。

中塚：最後に井上さん。

井上：今日はありがとうございました。何をフェアネスとするのか、公平とか公正とかいろいろな意味がありますが、サッカーのホームアンドアウェーはすごくフェアな制度だと思います。そういう中でワールドカップはセントラル開催の大会ですからどうしてもひずみが出てきます。そのひずみの中であってどのように商業的に成功させるか、あるいはメリットを享受するか、デメリットを解決するか、という観点があると思います。日本人も自分の国が有利になるからいいんじゃないの、ではなく考えてほしいです。

実はイングランド大会は歴史的には非難されています。ハーストのゴールばかりが話題になりますが、自国優先に設計されたということで、あんな大会はおかしい、とイングランド大会は非難されています。ですからイングランドにはワールドカップは2度とさせるな、となり、イングランドはその後やっていませんし、立候補すらしていません。そういうフェアネスという点で考えるならば、2019年の日本というのは世界からどう見られるかということは心配です。本日はどうもありがとうございました。

以上